ながら　同時に二動作の行はれる場合の叙述に用ひられる助詞である。

叫んだ　叫ぶ（バ、四）の連用叫びに口語助動詞たのついたものが、撥音便でびがんにかはりその音のひゞきをうけて下のたが濁音になつたのである。

ジョージは後を見送つて、帽子を振りながら叫んだ。

「ウエリントン公爵萬歳。」

この最後の一句は普通なら、

ジョージは後を見送つて、帽子を振りながら、ウエリントン公爵萬歳と叫んだ。

とあるのである。

文の成分から見ると「ウエリントン公爵萬歳」は叫んだ（述語）の補語になつてゐる。

補語は述語の上、主語の下にあるのが普通である。

ジョージは（主語）……………ウエリントン公爵萬歳と（補語）叫んだ（述語）。

この補語を述語の次に倒置したばかりでなく、獨立させて了つたのである。そのために「ウエリントン公爵萬歳」といふことばが非常に强く印象づけられるやうになつた。のみならず、この語で文を終らせたゝめに、ジョージ少年のその時の態度——農場の門の傍に立つて大聲に叫んだ後、次第々々に遠ざかり行く公爵の後姿を、一種の敬虔の念にうたれながら、何時までも〳〵見送つて化石のやうに立つてゐるを農場の一隅にあつて眺めてゐるやうに思はせられる。

この後にくど〳〵と少年の樣子を述べるよりはずつと有效な發表形式である。

第二十七課　ガラス工場

一、内　容

（一）現在八十歳、九十歳といふやうな高齢の人の幼時の追懐談や維新前頃の記錄によると、ガラスはギヤマン（オランダ語、Diamant の訛、ディアマントは金剛石、金剛石はガラスを切ることが出來ることから誤つてガラスの異名となつたものらしい）等と稱して、頗る珍重がられたものであるが、今では堂々たる建築物から九尺二間の裏長屋に至るまでガラスを使用してゐない所はない。

日常の食器から諸機械、子供の玩具に至るまで、或は裝飾品として或は實用品として最も廣い

範圍に亙つて利用されてゐるガラス。

其のガラスのもとは何か。どんな風にして製作されるものかといふ事は、少くとも兒童の求知心に投じた好材料といはねばならぬ。

此のガラスの製造についての一端を説明了得させようといふのが本課の使命である。

本課の内容について一瞥すると、大體次のやうである。

(一)1、原料の調合

2、熔融窯——フラスコ・コツプの製作

3、加工場の樣子と加工の實際

4、諸種の既製品

(二)ガラスの沿革

1、最古エジプトで發明され、それからイタリヤに移り、ローマの繁榮時代同地で發達したが、ローマ帝國衰亡の後は、ヴエネチアに移り、一二八九年ヴエネチア附近のムラノ島に轉じ、精巧品が出來たがこれが世にヴエネチア・ガラスといつたものである。

2、西暦一六〇〇年代にはヨーロツパ諸國で製造されるやうになつた。

3、西暦一七〇〇年の終から一八〇〇年の始には原料の製造・燃料の變更・熔融窯の改良によつて、ガラス製造に一段の進歩を來し、現今の狀態になつたのである。

(三)ガラスの成分

ソジウム(又は)ポツタシウム等の一價アルカリ ╲╱ この二種から成る複珪酸鹽である。
鉛(又は)カルシウム等の二價金屬

カルシウム、ガラス(石灰ガラス)……二價のカルシウム金屬を用ひたもの、

鉛ガラス……………………………………二價の鉛金屬を用ひたもの、

カルシウム、ガラスの二種

1、カリ、ガラス……カルシウム金屬とポツタシウムとで作つたもの、

2、ソーダ、ガラス……カルシウム金屬とソジウムとで作つたもの、

(四)カルシウム、ガラスと鉛ガラスの特徴

カルシウム、ガラス { 1、質が堅い。 2、諸種の作用に耐へる。

窓ガラス、板ガラス等はこの特性を利用したものである。

鉛ガラス { 1、光澤が美しい。 2、屈折率が大きい。

レンズや其の他の光學機械はこの性質を利用したものである。

(五)ガラスの原料

成分の條に述べたやうなものを含む材料を用ひるのであるが、原料配合の割合は一定しない。左に一・二の例を示して見よう。

1、板ガラス

白砂百分、炭酸曹達三十分乃至四十分、炭酸石灰二十五分乃至三十分。

2、食器ガラス

白砂百分、炭酸加里十五分、曹達二十分、石灰石十四分。

3、鉛ガラス

白砂百分、炭酸加里三十分、鉛丹(酸化鉛)六十分。

此等原料は、十分粉末とし、熔融窯に入れてとかす。

(六) 熔融窯

原料を熔融するには坩堝(ルツボ)を用ひ、または槽(タンク)を用ひる。

ルツボ 耐火粘土で作つた壺であつて、熔融窯の中におかれる。熔融窯は耐火煉瓦及耐火粘土で築き、石炭又は瓦斯で熱する。ルツボの中に原料を入れてとかすのである。

タンク といふのはルツボを用ひず、窯底全體を耐火煉瓦で張り詰め、こゝに原料を入れてとかすのである。この窯では多く瓦斯燃料を用ひる。

窯の周圍には數多の仕事口を設け、とかしたガラスをとり出すのに、便利のやうにしてある。

カマドの中でとかされたものは水飴のやうでネバ〳〵してゐる。これを適當の量だけ竿(鐵又はガラス製の中空の管)の一端につけてとり出し、細工をする。

細工の仕方

(イ)竿吹(さをふき) 竿の一方の端に口をつけてふき、竿をまはしながら一樣の厚さにふくらまし、次に其のふくらんだ一端に他の竿を附着させ、他の一人にこれを一直線に引きのばさせる。さうすると長い中空の管が出來る。

ガラス瓶、コツプのやうな中空のものも同樣に竿でふき鋏などで細工して作る。

(ロ)型吹(かたふき) ランプ、壺、ホヤ、ビール瓶等は竿の端に種をとつてから、吹きながら木型に當てゝ欲する所の形につくる。

(ハ)、板ガラスのやうなものは鐵製の型に流し込んで作る。

(ニ)、壓搾ガラスのやうなものは型に壓搾して作る。

燒きなほし

出来たものは急に冷却させると破損するので、徐々にひやすために「燒きなほし」といふ手續をとる。

(イ)冷竈といつて煉瓦で築いたもので溫度の次第に減じて行くやうする場合と、このカマドをいくつも作つておいて、順次に低溫度のものにうつして行くやり方とある。

(ロ)木灰の中に製品を入れて其のまゝ放置する方法もある。

(七)切子細工

冷却したものには種々の模樣を附けることがある。これを切子細工といふのである。

金屬又は木でつくつた圓板を速にまはしておいて、其の小口に金剛砂と水をつけ、ガラス製品をこれに押しあて任意の模樣をすりつけるのである。

初は目のあらい車にかけ、次第に目の細かい車にかける。此のまゝでは模樣の個所が不透明であるが、もしこれを透明にしようとするなら、

更に木製の車にかけ、柔い磨粉を用ひてこする。

又車を用ひないで模樣をつけるには、ガラス器の面に一樣に蠟をぬり、望む所の模樣を其の上にきざみ、模樣の部分だけガラスをあらはしておいて、これに弗化水素瓦斯を觸れさせて後、全面の蠟を除けばよい。

(八)色ガラス

種々の金屬酸化物・金屬鹽類又は金屬の細粉をガラスの原料と一所にとかしてつくる。

綠色ガラス……鐵又はクローム、又は銅と鐵

黃色ガラス……硫黃・硫化カドミウム・銀・鹽化銀のうち何れか一、

橙色ガラス……セレニウム、又は鐵とマンガン、

青色ガラス……コバルト、又は銅、

赤色ガラス……銅又は金、

黑色ガラス……銅又はマンガンと鐵、

(九)本課中に見ゆる「珪砂」・「ソーダ灰」・「石灰石」

(一)珪砂は石英の粉末でその主成分は無水珪酸といひ、化學記號は SiO_2 である。

(二)ソーダ灰は炭酸曹達の粉末で、主成分は炭酸ナトリウムである。化學記號は Na_2CO_3 である

(四)石灰石は主成分は炭酸カルシウムで、化學記號は $CaCO_3$ である。この石灰石の美しき乳

白のもの又は紋様入のものが大理石である。

珪砂と石灰石と化合すると珪酸カルシウム（二價の金屬鹽）になる。

珪砂とソーダ灰と化合すると珪酸ソーダ（一價のアルカリ鹽）になる。

この二價の金屬鹽と一價のアルカリ鹽との結合したもの即ち複珪酸鹽がガラス（この例のはカルシウム・ガラス中のソーダ、ガラスの例である）の主成分である。

二、形　式

（一）文の構想

純然たる說明文にするよりは、實際を見學した形にした方が兒童の興味を增す事が出來るのでガラス工場參觀記の體裁、即ち記事文の形にしたのであらう。

しかも單調無味といふやうな感じは少しもなく、次から次へと興味の湧くやうな點のみをとらへて描寫し、其の時々の感想をうまく述べてゐる。筆者は未だ一度もガラス工場を參觀した事のない人、橋本君といふのはガラス工場關係者の子供でもあらう。

原料調合室での職工に對する同情、あめ細工と思はせた製作の實況・模樣のほりつけや模樣かきの技巧・目もさめるやうな陳列棚の諸製品に對する興味等、初めから終りまで兒童の好奇心をそゝるに充分な筆致である。

興味中心の情景描寫ともいふべき筆をもつてガラス工場の概觀を說明しつくしたものといふべきであらう。

（二）文の段落

第一節　序　（百二十一頁六行——七行）

第二節　原料調合所の見學　（百二十一頁八行——百二十二頁六行）

第三節　熔解窯の見學　（百二十二頁七行——百二十四頁二行）

第四節　加工場の見學　（百二十四頁三行——九行）

第五節　陳列棚の見學　（百二十四頁十行——百二十五頁三行）

（三）主なる語句

町はづれ　「はづれ」は、文語はづる（ラ、下二動詞）の連用形が獨立して名詞になつたのである。そして町（名詞）と一所になつて一名詞になつたもの、

工場　工作をなす場所

工　タクミ・ワザ・ナイタ・テワザ、

工は定規のかたち、定規をもつ者は諸器具製作者であるから、工を諸匠の義とし又定規を用ひると器具が巧に出来るから巧飾の義とする。

調合　薬をあはせること、

調　本義は聲音の和合すること、轉じて廣く物の和合しとゝのふこと、

マスク(Mask)　1、ベースボールの時球を防ぐために審判官の面部にあてるもの、2、外氣又は粉末等を吸入することを防ぐために鼻・口を覆ふもの、

シャベル(Shovel)　土砂等をすくふ道具、形はジフノウに似て大きい。

ざく〳〵　擬聲語である。

かきまぜる　まぜること、かきは意味のない接頭語、

目も口もあけられない。

(二)「立ちのぼつて」の立ちのぼる程度を説明してゐるのである。

「目も口もあけられない」位にひどいの意。

られはられるの未然形、こゝでは可能(……デキル)の意、それにないがついてできないの意になる。

どんなにつらいことであらう。

「どんなにかつらいことであらう」「どんなにつらいことであらうか」等のか(疑問の助詞)を省略した形、上に疑問の語(こゝではどんな)があると下にあるべき筈の疑問助詞は除かれることがある、これは文・口語を通じてある。こゝも、その一例になつてゐる。

いかなる程度につらいのであらうか→隨分つらいことであらう、

あらうのうは推量の助動詞、

窯　漢音エウ、呉音カマド、本義はカハラ(瓦)をやくかまど、

竈　(漢音サウ 呉音)カマド(クド・ヘッツヒ)これは炊ぐカマド

周圍(シウヰ)　マハリ・グルリ

周　用と口の合字、本義は周到の周で言を用ふるにあたつて用意の周到なこと、轉じて一般によく行き亘つてあまねきこと。

圍　本義は兵をもつて城をかこみ守ること、轉じてカコム・メグル等の義となり、又敵をつゝみ攻める意にも用ひる。

□　にカコム意味があり、韋にもカコム意味がある。

きらきら　きらめくさまの幾分にぶいやうに見えるさまにいふ擬態語、

ふり動かしては　このはは或る事柄の幾度もくりかへされる意味をあらはすに用ひる助詞であ

る。より動かすことをくりかへす意味がこのはにある。

まるで　全く・すべて・のこらず等の意の副詞。

……のやうで　「やうだ」(比況の意の口語助動詞)の連用形。

「やうだ」は活用語の連體形又は體言(體言につく時は上に助詞のをとる)につく。

フラスコ(Frasco)ポルトガル語　英語ではFlask

化學實驗等の際、薬液を煮たり其の他の用に供するガラス製球狀のビン、

型　イガタ(鑄式)・カタ

イガタは、木でつくつたのを模

金でつくつたのを範

土でつくつたのを型

といふので、型といへば土製のイガタの事であるが、今ではひろく範にも模にも通じて用ひられる。

「型模」といふ熟語がある。イガタ・カタと譯す。

何が出來るであらうかと

前に疑問語の下にはかといふ疑問助詞のくる事を説いて置いたが、これがその一例である。

こゝは習慣からは、

「何が出來るであらうと」

としても差支ないのである。

コツプ(Kop)　オランダ語、ガラス製の盃・水飲など、英語のカツプ(Cup)が類似の發音で内容も同じである。

うながされて　サイソクサレテ・急ガセラレテ、

うながさはうながす(サ、四動詞)の未然形、それにれるの連用形れのついた形、(れるはこゝでは受身)

「あまり面白いので夢中で見とれてゐて時間のたつのを忘れてゐた氣持があらはれてゐる。」

細工　工を加へる。粗製品、又は天然物に細工をすること、

調べかは(調革)　機械の車輪のまはりにまとふナメシガハ、中心になる車輪の回轉を他の車輪に傳へるもの、

調に他に和合する意がある。ある一つの車輪の回轉のとほりに他の車輪にもその回轉を合はせる。甲の回轉と同樣の回轉を乙に與へるの意からしらべかはといふのである。

たり(ほりつけたり、……かけたり)

或る種の動作・有様などを併列して叙述する時に用ゐる口語助動詞たの連用形である。この場合には完了・狀態（……シテキル）・過去等の意味はうすくなつて叙述の併列の意味がつよくあらはれてゐるのである。

意味は、

「ほりつけてゐるものもあり、みがきをかけてゐるものもある」

飾りがけ　「飾りかけ」が二語つゞく關係上かけがけとなつたもの、「かけ」はかくの連用形。かへりと一所になつて一名詞をつくつたのである。かく（口語ではかける）（掛）はか行下二活用動詞で意味はいろ〳〵ある。こゝでは始めるの意（書きかく・書きかける）

「かへる事をはじめる」時、即ち「かへりはじめようとする時」の意で、所謂かへりがけになるのである。

陳列棚　ツラネナラベルタナ、

陳　本義は支那の地名。陳（チン）に通用して（ツラネル・ナラベル）意に用ひ、今では全く陳の代用となつて了つて陳は用ひない。

見せてもらつた「見せていたゞく。」より粗末ないひ方、兩者とも

先方の好意によつて「見る」事を行つた意味が含まれてゐる。

取分け　取りわけるの連用形が獨立して副詞となつたもの、「ことに・ことさら・特別」の意、

とり〴〵「思ひ〳〵・いろ〳〵」

とり〴〵に目もさめるばかりであつた。

「目もさめるばかりであつた。」は「とり〴〵にある→とり〴〵だ」といふ語を受けて自分の感じを述べたのである。而して「目もさめる」はどの位の感じであるか、その程度をあらはしたのである。

「目もさめる」「目がさめる」を感動的にあらはしたもの、即ちもはさし示すのと同時に感動の意をあらはす助詞である。

「ばかり」程度をあらはす口語助詞。

第二十八課　鐵眼の一切經

一、内　容

（一）鐵眼和尚が、佛教の寶典一切經の刊行に志してより十幾年、其の間あらゆる艱苦と戰ひ、つひに目的を達したといふ、其の堅忍不拔・確乎不動の精神を經とし、出水・飢饉に際しての大慈悲心を緯としたもの、尊い感激の中に浸らせようといふのが本課の目的であらう。

（二）本課の内容を摘錄して見ると、

(1)、一切經は斯界無二の寶典であるのに卷數數千にのぼるため出版は容易な事でないので世の中にあまり出てゐない。

(2)、鐵眼は畢世の事業として一切經の出版を企圖し、艱苦の末資金を集めたが偶々大阪の出水あり。罹災民のために一錢も餘さず資金を施與して了つた。

(3)、次いで集めた資金も近畿地方の大飢饉のために前同樣全部施與して了つた。

(4)、第三回の資金募集の結果、漸く初念成就の運びになつた。この間實に十八年。

（三）鐵眼の略歷

(1)、俗姓佐伯氏、諱は道光、肥後國益城郡の人、寛永七年の生れ。

(2)、十三歲の時剃髮して一向宗の僧となつたが、不德無才の者でも寺の格式によつて上位に居

ることを喜ばず。

(3)、明曆三年、長崎の東明寺に於て隱元禪師に謁して參堂し、次いで隱元に隨つて攝津の普門寺に至り、隱元の高弟木庵禪師に謁して黃檗宗に入門した。時に年二十六。（隱元は黃檗山萬福寺の開祖、木庵は第二代である。）

(4)、寬文三年楞嚴經を肥後に講じ、四年法華經を妙光寺に講じた。

(5)、一日慨然として曰く「佛教に關し寺院・佛像等は支那に少しも劣らず、高僧も輩出して居るが、たゞ大藏經の版の流布されてゐないことは殘念なことである。これを成就することによつて庶人と共に永く佛緣を結びたい」と。そこで二三子と大阪に行き專ら刻藏の謀をめぐらした。

(6)、八年春には一千兩を喜捨するものが出來たので、鐵眼は早速、宇治の黃檗山の隱元に告げた。所が隱元は大に喜び、その蓄へてあつた所の明版の大藏經を與へ、且つ山内の勝地を割いて藏版を藏する所とした。

鐵眼は更に江戶に出て資金を募つた。

(7)、十年には難波の信徒が藥師寺を重修し、鐵眼を請じて中興開山とし、寺號を改めて慈雲山瑞龍寺とした。

(8)、十一年にはまた江戸に出た。

(9)、延寶二年（靈元天皇の御代、徳川家綱將軍薨去の六年前）、父の病のため肥後にかへり、父の死にあひ、其の居所を直ちに寺領として三寶寺を開いた。その時細川侯は年々黄金一千錠を贈つて刻藏の資に充てしめることになつた。時に四十五歳。

(10)、延寶九年、大藏經將に功を竣らうとしたので表を製して之を後水尾法皇に奉る。

(11)、天和元年、刻藏の功を竣り、疏を徳川幕府に献ずるために江戸に行く。

(12)、翌天和二年正月門弟と瑞龍寺にかへり、ついで二月の末發病し、翌三月二十二日寂、年五十三、僧籍にあること四十年。

茶毘に附し、宇治村黄檗山の寶藏院の西の隅に葬つた。

◎本課教材は近世畸人傳・續日本高僧傳等によつたもので、其の他の鐵眼略傳等では教節に關する詳細は明瞭にわからない。要するに一切經を刊行しようと志してから完成までに二回其の資を救民に費したのであらう。

（四）黄檗山萬福寺

京都府宇治郡宇治村にあつて、我國黄檗宗の大本山である。

開祖は支那黄檗山に住持し、學徳一世にひゞいた隱元禪師である。承應三年朝野の懇請により六十三歳で渡來したのである。

上は後水尾法皇の御歸崇を恭うし、下は道俗數多の尊崇を一身にあつめ、徳川四代將軍家綱から山城の宇治に地を賜り、寛文元年起工し、十七八年間の年月を費して建立されたのがこの萬福寺である。

（隱元禪師の次は木庵禪師である。鐵眼はこの第二代木庵禪師の法子である。）

（五）一切經

大藏經のことを一切經ともいふ。

大藏經は大藏經律論の略であつて、支那譯及び支那日本撰述の佛教聖典の總稱である。

沿革

1、北周の武帝が勅令を發し、特別の藏庫を作らしめて一切經藏といひ、後漢以來譯出せられた經律論、即ち佛教聖典全部を安置した。尋いで梁の善慧は雙林道場に轉輪藏を起して經律論を安置した。それ以來各大寺はきそつて轉輪藏を起して經律論を安置するやうになつた。

開版

宋の太祖の開寶四年（一說には五年）、勅命によつて益州に於て大藏經の版を彫刻させ、十四

年を經て、太宗太平興國八年に至つて完成した。これが宋の大藏經である。ついで朝鮮高麗國にも大藏經の版を作らうとする擧があり、我國の建長年間に完成し、刊行流布した事がある。この木版は今に慶尚道の海印寺に傳へられてあるといふ。

我國に於ける沿革

佛教聖典の全部即ち一切經の渡來した年月は不明、

天武天皇の二年に始めて大和の川原寺で一切經書寫のことあり。

奈良朝に至つては一切經書寫の事はさかんに行はれた。

平安朝に入つてもこの事流行し、經藏を起して一切經を安置した寺もあつた。

弘安年中僧行圓が一切經の刊行を企圖した事がある。しかしその頃の刊本は傳つてゐない。

（鎌倉時代までは專ら一切經といひ、大藏經といはず）

足利將軍義持が使を遣して大藏經を求めた事がある。

德川三代將軍家光は僧天海に命じて活字大藏經を刊行させた。これは十年以上の長年月かゝつたもので、今も寛永寺の兩大師堂に木活版を藏してゐる。

寛文九年僧道光（鐵眼）は獨力で大藏經の刊行を經營し明僧隆琦（隱元）の賚持した明の北藏を飜刻した。その一切經版は黄檗版とか鐵眼版とか稱せられて、今に萬福寺山内寶藏院

の所管になつて現存してゐる。

明治に入つても二度ほどこの刊行の事があつた。

現今我國には宋藏・元藏・明藏・高麗藏などが流布してゐる。東京芝の增上寺所藏の宋版・元版・高麗版、東京淺草寺所藏の元版は國寶に指定されてゐるといふ。

（九）我國印刷術の沿革大略

1、文字を印刻する術は早くも上古にあつた。これは支那から傳へられたものであらうといはれてゐる。

2、印章の事は大寶令にも規定されてゐる。

3、書籍の印刷は何時代から始つたか不明。刻本の現存するものは奈良朝末光仁帝の寶龜元年百萬塔の中に納められた陀羅尼が最古のものであるといはれてゐる。（これは二寸に一尺ばかりの紙であるが、文字を木の板にほりつけたものをすつたのであらうとの事）

これが我國の製版印刷の元祖である。

4、鎌倉時代となると京都や高野山等で佛書刊行のことがあつた。これは佛書の刊行が最大の

功德であると考へた事によつて行はれたものらしい。
5、室町時代の初期にあたる正平十九年堺で論語の刊刻があつた。これが儒書刊行の始といはれてゐる。
6、戰國時代（足利十二代將軍義晴の大永年中）堺で醫者大全の印行があつた。
7、一體に室町時代には戰亂をよそに印刻の事はます／＼盛になり、活版印刷もそろ／＼あらはれて來た。
活版、即ち移植することの出來る活字は、一字版又は植字版といつて何時から用ひられたかはわからない。朝鮮から文祿の頃に傳來したものであらうといふ。
文祿二年には活字を選擇して古文孝經を印刷したといふ事である。これは家康が慶長二年の勅版に倣つて
8、慶長年間に至つて、德川幕府が七書の活字を作つた。
で有要の書をひろめようとしたのである。
9、慶長二十年には銅版活字が作られた。
10、元祿寶永となつては、版刻の業が益々盛になり、上下共に書籍の印刻がさかんになつた。
11、そも／＼木製の活版は鮮明を缺き誤字顚倒を生じやすかつたがために、大槪彫刻の木版を用ひた。（新井白石は銅製活字を作らうとしたが果さず、その後銅版活字は行はれず）

12、色摺の事は元祿・享保頃にはじまつた。紅摺から紅・藍・黃の三度摺となり、更に進步して金・銀・銅粉・雲母等の彩色摺となつた。
13、銅版は享和の頃にはじまり、專ら繪畫の印刷に用ひた。
14、德川末期には西洋式の鉛製活版がはじめて行はれるやうになつた。
15、明治二年には活字製造業を開いたものあり、明治四年には政府本木製活版を購入し印刷所をはじめた。これが後の印刷局である。
明治六年の頃からは鉛製活字が漸く行はれ、活版業を營むものが次第に多くなり、紙型鉛版術が行はれ、活字の書體は改良され、印刷機械も次第に精巧なものとなり、つひに今日の輪轉機を用ひるやうになつたのである。

（七）福田行誡

俗姓福田氏、武藏の人、江戶小石川の傳通院で剃髮し、淨土の宗義・天台の敎義等を研修した淨土宗の僧、深川回向院・傳通院の住職等を經て、明治十二年三緣山增上寺第七十一代の住職となり、明治十九年深川本誓寺に隱退してゐたが更に明治二十年京都智恩院の門主となり、翌年四月二十五日寂す。年八十三。
大日本佛法傳其の他の著書があり、學德共に高かつた。

二、形　式

（一）文の段落

第一節　一切經とは？（一二五頁五行――一〇行）

第二節　苦心の末に集めた資金を洪水の災害者に施したこと（一二六頁一行――一二七頁九行）

第三節　再度の資金募集（一二七頁一〇行――一二八頁四行）

第四節　再度募集の資金を飢饉救濟費に當てた（一二八頁五行――一二九頁一行）

第五節　三度目の募集資金によつて頭初の目的を成就した（一二九頁二行――一三〇頁六行）

第六節　福田行誡の批評（一三〇頁七行――八行）

（二）

題名が「鐵眼の一切經」とある如く、鐵眼が一切經を出版するに至つた顚末を明瞭にし、其の間に於ける不屈不撓の精神・徹底した大慈悲心を味はせようとするのに如何なる發表形式をとつたか。

(1)、何としても兒童の世界否今日の大人の世界から考へても緣遠い當時の出版界のことが分明でない點、

(2)、それから兒童の日常生活と交渉の少い經典に關するものである點、

以上の二點から考へて見て、なか〳〵の難教材であるといはねばならぬ。これに比較して見ると同一傾向のものとして考へられる「松坂の一夜」などの內容は、はるかに分り易いものであらう。

すべてさうであるが、物事といふものは眞の理解の下にのみ、眞の共鳴・眞の同情といふものは起るものであつて、內容の漠然たるものに對して、同情せよ・共鳴せよ・感奮せよと强ひたところで何の效があらう。情・意に關するものは先づ知から入り、知に徹底せしめねばならぬ。その意味に於て本課の各節をながめて適當な補說・誘導を試みる事が第一の仕事である。

(1)、第一節

冒頭に一切經の如何なるものか、出版については云々と說明したことはまことに當を得た書振といはねばならぬ。しかしこれだけの記事を單にすら〳〵と取扱ふだけでは到底鐵眼の決心した事についての點の共鳴は望まれない。紙數に限りもある事ではあらうが、も少し痛切な感動をひき起すやうな文句がほしいと思ふ。そこで補說の要が生じてくる次第である。

そして一切經といふものゝ如何なるものか、當時の出版が今日のやうでないことを呑込ませて置いて、第二節以下・即ち本課の中心點への理解・同情から共鳴・感奮へと導いて行くのがよい。

(2)、第二節

第一節の補說指導によつて一切經が世の心ある人に渴望されてゐること、それから出版刊行の企劃の容易なものでない事も充分にわかつた。そこへ鐵眼といふ僧があつて、「一代の事業として一切經を出版せん事を思立ち、如何なる困難を忍びても、ちかつて此のくはだてを成就せんと」

と述べてゐる。

一切經といふものが世の識者から重視せられ、而して手に入りにくい、どうしたら手に入れられるであらう、と思ひつゞけられてゐる折から鐵眼のこの意圖は大に其等の人達から歡迎された事は勿論である。

そこで考へなければならぬ事は、當時それほど有意義な事業であるならば一兩年で資金も立どころに集り、さほど至難な事もあるまいと想像される點である。その點についても單に字句の表面のみについて素通りをすることは愼まねばならぬ。それには、

1、交通機關の不完全なこと　汽車が走り、自動車をとばせる事の出來る今日にあつては朝に東京の甲を訪れ、夕には靜岡の乙に謀るといふ事も出來るのであるが、馬・駕籠の他には徒歩によるのほかない當時にあつてはそんな事は思ひも及ばぬ所。

2、一切經それ自身が五卷や六卷ものでなく、幾千卷といふものであるとすれば、その費用も莫大なものである。それを獨力でやらうといふのであるから、無謀に近い計畫であること。

2、寄附金の輸送も容易でないこと、今なら爲替をくみ、小切手を切る等の方法もあるが當時ならそんな事は一切不可能で、最も危險な現金輸送をしなければならなかつた。

4、文書の往復も不便なこと・今時なら普通郵便、書留郵便、電話、電信等によつて自由自在に音信も出來るが、當時なら飛脚便によるのほか方法がない。

等の事について補說をし、

「如何なる困難を忍びても」

の語の意味を明瞭にしてやらねばならぬ。さうでないと「如何なる困難を忍びても、ちかつて此のくはだてを成就せんと」等といふ事が單なる修辭上の誇張であるとしか思はずに過ぎて了ふであらう。數年を費し、漸くにしてとゝのへ得たる資金を惜しげもなく罹災民救助の

ために消費して了つたことは、如何なることを意味するか、

「我が一切經の出版を思立ちたるは佛教を盛にせんが爲、佛教を盛にせんとするは、ひつきやう人を救はんが爲なり。喜捨を受けたる此の金、之を一切經の事に費すも、うゑたる人々の救助に用ゐるも、歸する所は一にして二にあらず。一切經を世にひろむるはもとより必要の事なれども、人の死を救ふは更に必要なるに非ずや。」

は、鐵眼の心中の全部をあらはしたのであらう。

一切經の出版と人々の救助を一にして二にあらずといつた點は、一切經出版の目的を明瞭に物語るものであつて、鐵眼の心の崇高さを一倍益すものである。

これは強い信念のほとばしりであつて通常人の容易に言語・行動にあらはす事の出來ない點であらう。口にこそ數年といふが、あらゆる困苦の末の資金である。信念なくして他の使途に當てる等といふ事は出來る筈のものでない。

それから、

「喜捨せる人々に其の志を告げて同意を得、」

も、唯讀下してはいけないと思ふ。

もと〳〵鐵眼の素志に贊成して喜捨した人々であるから、鐵眼と同じく佛心のある人々であらう。それで鐵眼の願に對して同意を與へた心理狀態も想像がつくのである。

(3)、第三節

第二回の資金募集も前と同じく數年を費し、

「效果空しからずして宿志の果さるゝも近きにあらんとす。鐵眼の喜知るべきなり。」

とあつて、第四節の敍述の序說になつてゐる。

(4)、第四節

第二回の資金募集もその完成に近い頃、近畿地方に起つた大飢饉のために再び資金全部を投げ出した。これ亦、一切經の出版と人々の救助とを同一視するの信念に出でたことを思へば鐵眼の崇高なる人格を偲ばずには居られない。

(5)、一度ならず二度までも資金を散じた鐵眼は、更に第三回の資金募集に着手した。

「鐵眼の深大なる慈悲心と、あくまで初一念をひるがへさざる熱心とは、強く人々を感動せしめしにや……」

と、あるのは尤もなことであらう。毛頭私心の藏するなく、たゞ〳〵佛教のため世の人々のためにとて、不屈不撓・堅忍不拔の大勇猛心を奮起されたことは人々を感動させずにはゐかないにきまつてゐる。

かくの如くにして、終に初志を貫徹した所の鐵眼の心中や察すべきである。

(6)、而して最後の行誡の鐵眼評は本文の大意を摘錄したものとも見ることが出來るし、又筆者の思ふ所を行誡の辭を借りて言つたともいへる。

(三)主なる語句

眼　漢音ガン　呉音ゲン

集　漢音シフ　呉音ジフ　アツム・アツマル

集　1、人の寄りアツマルこと。

2、文集・詩集などいひ、散つてゐるのを一つ所へアツメルこと。

聚　一所へ寄り合ふ意、會と同義、

萃　寄りたかること、

輯　彼や此やを取りあつめて一部の書を編すること、

輳　輻輳と連ね、車の矢が轂へ寄りあつまること、そのやうに一つ所へよつて來ること、

叢書　書籍をあつめる・あつめた書籍、

叢　漢音ソウ　呉音ス、ムラガル・アツマル・アツメル・クサムラ、

籍　漢音セキ　呉音ジヤク　カキモノ、

書物・書冊・記錄・カキツケ・フダ、

貴　漢・呉音キ

タフトブ

貴　賤に對す、人物の上品、直段の高いこと。貴者は位の高い人、

尊　卑に對す、目上に向ひ敬ひ重んずること。尊者は齒德ある尊い人、

崇　タカシとよむ字で、タフトブとよめば仰ぎ慕ひ重んずること、

上　カミとしてたふとぶこと、

尙　上と同じ

卷　漢音ケン　呉音クワン　卷數(クワンスウ)は書物の卷のカズ、

一般に曲げ束ねる義に用ひる、書畫のマキモノの義にも用ひる。

書冊に卷といふのは古昔竹簡(タケのフダ)を卷いた事からおこつたのである。

出版　書籍等を版にすること

版　漢音ハン、呉音ヘン、

木を二つに判つこと、轉じて判つた一片または平たいイタの義、

後、版に書いたカキモノの義とし、更に活版の義とす。

集めたる——

たるは完了のたりの連體形、集めるといふことが完了した、即ちあつめた——の義、

——にして　「——なり。」の中止法である。

「一切經は　なり。」とするのを「一切經は……にして」と中止して、次の叙述につゞけたのである。

貴ぶところなり。「貴ぶところの者なり」の略で、漢文直譯體の文の形式である。

無二の寶、即ち二つとない寶、これにならぶものは一つもない立派なものだといつて貴んでゐる。

しかも　反意の接續詞で、前の叙述と反對の事柄を述べる場合のつながりに用ひられる。即ち非常に貴ぶものであるなら、どん〱出版する筈なのに非常に大部のものであるがために一朝一夕に出版することはできない意味になつてる事がしかもの後に述べられてゐる。

されば　「さういふわけであるから」と理由を示す接續詞で、世の中に數多く出てゐないことを述べ、學者が研究しようと思つてもなか〱手に入りにくいことで第一節を結んでゐる。

以上のしかも・さればはまことにうまく用ひられてゐる。

支那より渡來せるものの僅かに存するのみにて、

「支那からわたつて來たものが少しばかりあるだけで。」

渡來せるもの　るは完了・狀態の意の助動詞りの連體形、こゝでは完了。

ものの　このは主格をあらはす助詞で、ガと譯す。

今より二百數十年前、

「——といふ僧ありき。」の述語ありきの副詞的修飾語である。「僧があつた。それはいつかといへば「今から二百數十年前に」といふのである。

ありき　きは過去の助動詞。

一代の事業として「自分一代の事業、即ちこれから死ぬまでの仕事として」の意、

出版せん事を　んは推量の助動詞むの音便、こゝでは推量を自己に用ひたから、意志の意味である。

「出版しようといふ事を。」

思立ち「心にきめて、」

ちかつて(盟)「心にちかふ」の意の副詞、必ずの意、

くはだて　くはだてること、いとなみ、もよほし、

他動詞、タ下二活用くはだつ(企)の連用形が名詞となつたもの、（連用形の名詞法）

成就　物事の仕上がること・なりあがること
成　戊と丁の合字、草木の十分に繁茂し盡したこと、轉じて廣く功卒り・業就る義とす。
就　人の作つた最も高い丘のこと、轉じて成就の義に用ひる。
ちかつて此のくはだてを成就せんと、
「必ず此のくはだてをなしとげようと思つて」。「せん」のんはむで意志をあらはす。
とゝのふ（調）　全備させる・そろへる、
つのる（募）　ひろく求めて寄せる。
とゝのふる事を得たり。「とゝのへることが出來た。」
とゝのふる　は下二とゝのふの連體形、得はあ下二動詞得の連用形。たりは完了の意の助動詞たりの終止形。
將に出版に着手せんとす。
將に　漢文では將は副詞と助動詞を兼ねた字で、「まさに……とす」と用ひられる。これが國語にも漢文直譯體の文にそのまゝ用ひられてゐる。こゝもその筆法である。意味は「すんでのことに・もすこしで。」
「もすこしで出版に手をつけようとしてゐた」の意。

方に　「丁度・あたかも」
正に　「まさしく・たしかに」
たまく　「丁度其の時」
路頭　みちのほとり、みちばた、
「――に迷ふ。」は「生活することが出來ないで乞食をすること。」の意
數を知らず　無數の意　カゾヘキレナイ。
家を流し產を失ひて　「路頭に迷ふ者數を知らず。」の原因を示す。
目擊　確かに目に見ること、
悲しみにたへず　悲しい氣持をがまんすることが出來ない。→悲しくてたまらない。たへずは「たへられず。」の意。悲しみは形容詞悲しの語幹悲しに接尾語みがついて出來た名詞、「悲しむこと、悲しい心」
つらく　念を入れて・つくぐ・よくく。
思立ちたるは　たるの下の「事」といふ體言を省略した形。
佛教を盛にせんが爲　爲で切つてあるが、これはなりの中止法にしてを省略したのである。「……しようとするためであつて」の意。

ひつきやう（畢竟）　つまり、

喜捨　　心から進んで、佛に物を供へ、又は貧人に物を施すこと、

「喜捨を受けたる此の金、之を」「喜捨を受けたる此の金を」の意味を强めた形である。「喜捨を受けたる此の金」といふのを一旦いひきつて置いて更に之をと書き出したために語意が非常につよめられた事になる。

譯す場合には、

「喜捨を受けたこの金を」

でよい。

費すも・用ふるも　「費す事も・用ふる事も」の意、

歸する所は一にして二にあらず。

「歸する所」は「歸着する所」と同意。「おちつくところは」の意。

「一にして二にあらず。」は「一なり。二にあらず。」の二文を一文にした形である。

本文の「二にあらず」は「一にして、（一なりの中止法）」を更にくりかへして說明したもの．

卽ち、

「歸する所は一なり。」

とあれば意味はわかるのに、それを更に强めたいがために「二にあらず」」

をつぎ足して、

「歸する所は一にして、二にあらず。」

としたのである。意味は．

「おちつく所は一つである→同じである（ちがふものではない。）」

となる。

卽ち「どちらに費しても、精神上に於ては同じ事をすることになる。」

の意味である。

もとより　勿論・いふまでもなく、

更に　一層、

必要なるに非ずや　「必要なる」の下に體言事を略した形、

必要なる事にあらず→必要な事でない。

やは反語の助詞、

「必要なことでないか、いや必要だ。」の意、

つら〳〵思ふに、「…………………。」と

これは

「つらく『…………。』と思ふ」

といふ文の述語（こゝでは思ふ）を副詞として文のはじめにもつて行くと文の調子はとゝのひ、

述語の意味はつよめられるのである。

すなはち（乃）「そこで、」

當てたりき「あてがつた。」

苦心に苦心を重ねて「非常な苦心をして、」

殘らずなりぬ。

ずは打消助動詞ずの連用形であつて、下の活用語なり（爲るの連用形）につゞいてゐる。

ぬは完了の助動詞ぬの終止形。

「殘らなくなつた。」

空しからずして

空しから　空し（形容詞）の連用形「空しく」が副詞となる。其の副詞が動詞のありと複合して空しかりといふ形容動詞になつたのである。

その未然形が空しからである。

してはありての意の助詞。

空しは「無益だ・むだだ」の意。

「空しからずして」→「空しくあらずありて」

「むだでなくて」の意。

積果空しからずして　充分きゝめがあつて→その努力が報いられて、

宿志　かねがねからの志、日頃のねがひ、

宿志の果さるゝも近きにあらんとす。→宿志の果さるゝ日も近きに……。

あらんのんはむで、未來の意。

「日頃からの願のかなふ日ももう間近になつた」の意、

知るべきなり　べきはべしの連體形、可能（……デキル）の意。

なりは指定の意の助動詞（……デアル）。

知ることが出來る→充分に察することが出來る→鐵眼は胸中どんなにかうれしいであらう。

──の比にあらず「──とくらべものにならない。」

日々にまさりゆくばかりなり　毎日々々ひどくなつて行くだけだ。

ばかりはたゞそれだけの意で、（他に何等かはつたことは起つて來ない）の意。

こゝにおいて　漢文から來た語で、そこでの意、

―を以て　「―を用ひて」→「―で」。

力の及ぶ限り　「出來るだけ、」

又もや　又といふのを感動的にあらはした語、

もは同じ狀態が他にもあることを示す助詞、「前にもあり今度も」といふので、もを用ひたのである。しかし、こゝではこのもが無くても、又だけで、この意味は充分にあらはせるのである。だからこれはかろくそへられたゞけである。

やは感動の意をあらはすために加へられた助詞。

留めざるに至れり。―留めざる有樣に至れり。

りはこゝでは完了の意。

「ないやうな有樣になつて了つた。」

慈悲心　「なさけ心、」

慈　人に樂を與へてやること、

悲　人の苦を除いてやること、

あくまで　「十分に・いやになるまで・はてのはてまで・どこまでも」

初一念（しよいちねん）　「思ひ立つたはじめの考」

感動せしめしにや　にとやの間にあらんを補つて見るとよくわかる

感動せしめしに(在)あらんや→感動せしめしならんや。

「感動せしめしならん」は「感心させたのであらう」の意、

やは單なる疑問の意の疑問助詞、

「感心させたのであらうか、多分さうであらう」となる。

着々として＝着々、

着々、物事が豫定の通りはかどること。

實に此の時よりの事なりとす。

「全く此の時からの事である。」の意。

「一切經はこの時から廣く我が國に行はれるやうになつた」の意。

滿ち〳〵たり。＝滿ちに滿ちたり、

たりはこゝでは狀態（……してゐる・……してある）の意、

「一ぱいになつてゐる。」の意。

感歎し　「ほめて」の意、感は心に感ずる、歎はホメル意。

刊行　同じ印本を多數作製すること、（印本トハ印刷セル書物ノコト）

刊　ケヅル・キザム

昭和五年四月二十日印刷
昭和五年四月三十日發行

定價金壹圓七拾錢

不許複製

著者　田巻素光

東京市京橋區新湊町三ノ六
發行者　横須賀康

東京市本所區花町二十四番地
印刷者　鈴木滿壽男

東京市本所區花町二十四番地
印刷所　大東印刷所

東京市京橋區新湊町三ノ六
發行所　大正書院

發行所　大正書院

不許
複製